ヒカルの碁　神の一手を極めし者

ソウルメイジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒカルの碁　神の一手を極めし者

【Ｎコード】
Ｎ９９５７Ｚ

【作者名】
ソウルメイジ

【あらすじ】
ヒカルと別れた佐為はある日突然再び現世へと舞い戻り、ある碁盤に宿る。
その碁盤をもつじいさんの孫であるユウはひょんなことで、幼なじみの小雪とともにじいさんの家に行くことになる。
そこで、その碁盤を見たユウは、ヒカルと同じようにサイと出会い、そこから物語が始まる。
あまり、うまくはできないかもしれませんが、見ていただけるとうれしいです。よろしくお願いします

あと、大変申し訳ないのですが、よく編集をいたします。できるだけ、そのようなことをないように心がけてまいりますが、私もまだまだ未熟ですので、大目に見てやってください。
それでは、くどいようですがよろしくお願いします。

サイとの出会い

「結局、進藤ヒカルも神の一手には届きそうにない。あの段階ではまだはやかったのだろうか？塔矢アキラも届かぬであろう。これでは私がつまらない。佐為、いま一度そなたを現世へと向かわせる。また新たな私への挑戦者・・・神の一手を極めし者を導いてくれ・・・・・・・・・・・・」

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

あれ？私はなぜまたココにいる。私の役目はもう終わったはずだ。だからあの時私はヒカルの前から姿が消えた。ならばなぜ再び私はココにいる。

人のいる現世に・・・

どうして私は再びどこの誰のものかもわからない碁盤に宿っているのだ？

わからない、だがきっと神様が再びこちらへ来てもいいと、そう思われたのだろう。

だったら、また私は待つ。虎次郎やヒカルのように、私を見つけてくれる人が来る日を

そして、今度こそ極めて見せる。神の一手を・・・

○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●

「・・・きて・・・・ねえ、起きてってば」

「・・・・はっ！、おい、テストは？」

「とっくに終わったわよ、バカねぇ、なんでテスト中に爆睡なんてするのよ」
しまったぁ、今日は真面目に受けようと思っていたのにぃと早坂ユウは後悔していた。
「あんた、補習行き確定ね」
「そういう小雪だって、いっつもま・じ・めにテスト受けてても補習ばっかじゃん」
「あんただってかわんないでしょ」
「そんな事ねぇよ、俺はテスト今日みたいに真面目に受けねぇから補習なんだよ。お前と一緒にすんな」
今の発言にイラッと来た小雪がユウの席の机をバンと叩く。
「結局補習なんだから一緒じゃないっ！」
それに負けじとユウも椅子から立ち上がって反抗する。
「一緒じゃねえよ、俺がテストを真面目に受けたら補習はおろか、学年で一桁取れる点数だってとれるぜ」
「いったわねぇぇぇ」
「ああ、いったぜ」
白熱した二人の仲に、一人のクラスメイトが
「おいおい、夫婦（めおと）漫才はその辺にしておけよ」
といい、クラス中に笑いが起こった。
だが、二人はまだまだ納得できていないようで、フンッとお互いにそっぽを向いていた。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

その日の授業が終わるころには二人はすっかり仲直りして、元の仲のいい二人の戻っていた。
というのも、この二人は家はとなり通しで、幼稚園そして、今通っている小学校でも6年間で一度もクラスが違わなかったというほど何もかもが一緒なのだ。

家が隣ということは当然下校も同じ道になる。さらにユウと小雪の地域には6年生がユウと小雪二人しかいないため、二人での下校も当たり前となっていた。
いつものようにランドセルをもった小雪がユウの方へとやってくる。
「ユウ、帰ろ」
満面の笑顔でユウに向かって微笑みかける小雪。
「悪い、今日はちょっとジーちゃんのところにいこうとおもってるんだ」
「ふーん、そうなんだ。じゃあ、私もつれてって」
さも、当然のように自分もつれ行くように言う小雪。
「なんでお前、ジーちゃん家なんて行きたがるんだ？」
「最近、顔だしてなかったし、せっかくユウが行くんだったら私もいこうかなって思ってさ」
ユウのおじいちゃんである早坂源次郎の家は、ユウの家から歩いて5分という位置にある。源次郎は、誰にでも愛想がよく、幼稚園のころからユウとよく遊んでいた小雪は毎日のように源次郎にの家に顔を出していた。当然ユウも一緒に、だ。だが、最近では学校も忙しく、しばらく二人とも顔を出していなかったのだ。
しばらく考えた後で、特に問題ないと見たユウは
「じゃあ、行くか」といった。
それに続いて小雪も笑顔で
「うんっ！」
とうなずいた。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

外はまだ6月前期だというのに夏本番といったように暑かった。
その暑さに耐えながら二人は学校からしばらく歩き、ようやくユウと小雪は源次郎の家に到着した。
久しぶりだったからと言って特に道に迷うこともなくすんなり来るこ

とができたのは、本当に幸いだった。
ユウがチャイムを押すと、中から、「はーい、今行きます」としわがれた声がユウたちに聞こえた。
その声は、小さいころから何も変わっていない、全てを包み込むような優しい声だったので一発でその声の主が源次郎だと二人はわかった。
声が聞こえて数秒後、ガラガラとドアが開いた。
そこから姿を現したのは、体つきはやや小柄で前かがみになっていて、髪の毛が見事に真っ白な
おじいさんが立っていた。源次郎だ。
源次郎は二人の顔を見ると、すこし驚いたようだったが、それでも優しい表情はくずさずに
「おお、ユウ、それに小雪ちゃん。いらっしゃい。」と言った。
それに対して二人も
「ただいま、ジーちゃん」
「こんにちわ」
とあいさつ。
「うちにお入り。外は暑かろう。アイスをだしてやる。」
その言葉を耳にした二人は、
「やったぜ」
「やったぁ、うれしぃ」と口ぐちに喜びを言葉にしながら中に入った。

○●

家に入ってユウと小雪はリビングに、源次郎は台所へと向かった。
リビングについた二人が目にしたのは、碁盤だった。
テーブルが部屋の真ん中に置いてあって、そのすぐ右隣りに碁盤がカバーをかぶせられておいてあった。

今まで、この家に来たときにそんなものがあった記憶の無い二人にとってこれは、大きな驚きだった。
と、同時に疑問でもあった。ジーちゃん（おじいさん）の家にこんなものあったかな？と。
しかし源次郎が台所からアイスを取って二人のもとへ来ると二人はすぐにそんな事なんか忘れて、アイスへと走っていった。
真ん中に広がる６人はすわれそうなでかい机でアイスを食べ終えるとさっきの疑問が再びユウの頭をよぎり源次郎にその疑問をぶつけることにした。
「ジーちゃん、この台いったい何に使うの？」
「ああ、それはのぅ、碁盤というものじゃ。そのカバーをとってみぃ」
そういって碁盤をさす源次郎。碁盤のことをなにもしらないユウはこれを取ったらなにかでてくるのではないか、と思い面白そうという反面、怖いという感情の狭間から恐る恐る碁盤のカバーを取った。
すると、そこには無数の傷のついたますめ３６１ある一般用の碁盤があった。
「ボロボロじゃん。なんでこんなものにカバーなんてかけてるんだよ」
そういってユウは、がっかりするようにカバーを碁盤にかけなおした。
すると、小雪と源次郎はユウが何を言ってるのかわからないと言った表情を浮かべた。
「何を言っておるんじゃユウ。この碁盤は先週買った新品じゃぞ。ほらこの通りピカピカではないか」
そういってもう一度カバーを取る源次郎。
しかし、ユウにはどこをどう見ても古びた無数の傷をもつ碁盤にしか見えなかった。
すると、突然、ユウの心の中にある声が聞こえた。
―この傷があなたには見えるのですか

「だからそういってるじゃん」
―あなたには私の声がきこえるのですか
えっ！？とユウは思った。今の声はいったい誰だ、と。
―私の声が聞こえるのですね
ユウは不安になって「誰だっ！？」と声を上げ立ち上がった。
ユウのその様子に小雪と源次郎は不審感を抱き
二人して懸命に「ユウどうしたのじゃ」
「どうしちゃったの、ねぇユウってば」とユウに呼びかけている。
しかし、不安でいっぱいであるユウにその声が届くことはない
―見つけた。今回はすこし早かったですね。
どこか喜んでいるかのように聞こえるその声はユウの不安をさらに増加させた。
思わず、身構えるユウ。
その様子を冷静に、見た源次郎は
「救急車じゃ。救急車を速くっ！」と小雪に叫ぶ。幻聴を聞いていると思っているのだ。
―あまねく神に感謝します。
すると、急に碁盤が光だし（ユウにしか見えていない）昔の白い衣装に身を包んだ一人の男の姿が、ユウの前に突然現れた。
そこで、ユウは気を失った・・・。

サイとの出会い（後書き）

どうでしょうか？ヒカルの碁　神の一手を極めし者　楽しんでいただけたでしょうか。
また、まだまだ初心者で拙い部分もあるかと思いますが、頑張っていこうと思っています。よろしくお願いします。

プロフィール

？　名前　　早坂　ユウ

年齢　　１２歳　（小学６年生）

身長　　１４７ｃｍ

体重　　３６ｋｇ

特徴　　髪の毛は少し長めで左腕にミサンガをしている。
　　運動が得意　勉強が苦手

好きな食べ物　オムライス

嫌いな食べ物　ゴーヤ、ピーマン

家族構成　　ひとりっ子、両親は健在
　　父親は部長　母親はヘルパー

？　名前　　夢咲　小雪

年齢　　１２歳（小学６年生）

身長　　１３９ｃｍ

体重　ひ・み・つ？

特徴　ユウの幼なじみ。ユウとは逆で右腕にミサンガをつけている。
ポニーテルで、気が強い。

好きな食べ物　基本的に甘いものなら何でもＯＫ

嫌いな食べ物　しょうが、漬物　梅干し

家族構成　妹が１人　両親ともに健在。父親は単身赴任中
母親は主婦

？名前　早坂　源次郎

年齢　６３歳

身長　１４８ｃｍ

体重　４３？

特徴　髪の毛が真っ白。小柄で、頭がキレる。碁の経験あり。
年中にこにこしている

好きな食べ物　刺身、漬物

嫌いな食べ物　カレー、ハンバーグ

？　名前　中原　優香

年齢　２７歳

身長　１６４？

体重　いうわけないでしょっ！

特徴　口調がかるくだれでも話しかけやすい雰囲気を持っている人

進藤が経営する碁会所で受付をやっていて、そこの子供たちからは中原さんと呼ばれている

茶色にそめた髪もすこし特徴的

好きな食べ物　なんでも好き

嫌いな食べ物　特になし

碁会所

・・・お前は誰だ？

―私？私は藤原佐為（ふじわらのさい）平安の都で貴族に囲碁を教えておりました。

囲碁？ってあの台でする何かのことか？って平安っ！？ってことはお前

―はい、あなたの想像通りです。

何の未練があって俺の前に現れたんだ？

―碁が打ちたい。それだけです。

ふーん、で俺に碁をさせたいってか

―はい！囲碁はわたしにとっての幸せそのもの。打てなければ死んだも同然です。

お前もう、しんでるけどな

―それに・・・私は今度こそ極めたい。神の一手を

そこで、ユウは目を覚ました

○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●

気が付くと、ユウは自分のベットで寝ていた。丁寧にパジャマにま

で着替えさせられている。
結局昨日何が起こったのか覚えていないユウはとりあえずいつものように準備をして学校へ行くことにした。
母親には「あんた、今日一日は休みなさい。また急に倒れられても困るし」と言われたが、ユウにしてみれば一日中
部屋でゴロゴロしているほうがよっぽど退屈で学校へ行っているより倒れそうだったので「大丈夫だって」と言って
準備を開始した。
ちょうど準備が終わったころ、家にチャイムの音が鳴り響いた。
多分小雪が鳴らしたのだろう、あいつ、いっつも見計らったようにいいタイミングできてくれるもんなぁとユウは苦笑しながら思う。
ランドセルを背負って、行ってきまーすと大声で叫び玄関のドアを開けるとそこには、やや不安げな顔をした、普段と同じくポニーテールの、真っ黒のTシャツにショートパンツ姿の幼なじみである夢咲小雪の姿があった。
小雪はユウの姿を見るなり、大丈夫？と尋ねてきたが、もう平気。元気だぜとユウが言うと小雪の不安げな顔も笑顔に変わり、また二人で登校した。

○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●

学校につくと、いつものようにクラスメイト達が「相変わらず、仲睦まじいカップルだねぇ」とヤジをとばし、それに対して必死に批判しているうちにＨＲの時間になり、その日の授業が始まった。
２時間目が終わったころ、小雪が妙に威張った顔をして、女子の輪を抜けてこちらの方に寄ってきた。
ユウは、嫌いな授業ばかり２時間続いたので、もうくたくたと言った感じに机にへばりついていた。
「ユウ、あんた昨日いったわよねぇ」
妙に悪女らしい行動をとり今にもおーほっほっほと叫びそうな雰囲

気を出している小雪。しかしそんなことに構う気力もユウにはなく
テキトーに「なにが？」とだけ返した。
すると、小雪は自信に満ちた表情で
「昨日アンタ、俺が本気を出せば、学年で一桁にだって入ることも
できるぅ、とか言ってたわよね？」
「ああ、言ったけど」
この時ユウはもうすでに半分寝ており、小雪の話など耳にも入れて
いない。
「3時間目、社会テストなんだけど」
「入れる、入れる」
「あ、そう。そこまで自信があるなら見せてもらおうじゃない。」
つまらなそうにして、帰っていく小雪。多分ユウの慌てふためく態
度でも見たかったのであろう。
その後、小雪は再び女子の輪に戻っていき、昨日ユウがね・・・・
と昨日のことを説明した後にユウのやったこと～と言って「だ、誰
だ！？」といわざとらしく挙動不審の演技をして女子全員で大笑い
していた。
そして、しばらくしてキーンコーンカーンコーンという小学校独特
のチャイムがなり3時間目のテストが始まった。
ユウはテストが配られ始めてから、初めてさっきなぜ小雪が自分に
対してなぜあのような行動をとったのかを理解した。
さっきは、これのことを言っていたのかぁ、まじーなぁ、俺、社会
って苦手なんだよなぁ。でもあいつが言い訳を聞くわけもないだろ
うし、とテスト開始１０分ずっと頭を悩ませていた。
すると、再びまたあの声がユウに聞こえてきた。
ほう、歴史の問題ですかぁ、と。
ユウは再びあの時のことを思い出して、一瞬あたり一面を見回した。
すると、昨日見た昔の白い衣装に身を包んだ髪の長い一人の男がユ
ウの左後のほうから、テストに顔をのぞかせている姿を見つけた。
左後ろを直視しているユウのその姿を見た先生が

「いくら補習が嫌だからってカンニングはだめですよ、早坂君」といい、テスト中にも関わらずクラスが笑いで包まれた。
ユウは、顔を真っ赤にしながら「す、すいません」と言って、再びテストに顔を戻した。
その姿を隣の席から見ていた小雪はくすくすとわらい再びテストに視線を落とした。
ユウはテストを何とか解きながら佐為に向かって話しかけることにした。
（昨日のアレ、夢じゃなかったのかぁ）
―はい。
（で、お前誰だっけ）
―佐為です。
（佐為かぁ。でも悪いな。俺、碁なんて全然しらねぇし、やる気もサラサラねぇんだ）
―そんな、酷いっ！
佐為の悲しみがユウの心を覆う。すると突然ユウに吐き気がやってくる。
これは、まずいと思ったユウはとりあえず吐き気の原因を佐為だと断定しどうにかしてとめなければと
思い佐為に
（タイム、タイム。この話はちょっと後だ。とにかく俺の吐き気を止めてくれ）と懇願した。
なぜユウが吐き気に襲われているのかヒカルという前例のおかげで分かっていた佐為は、ユウのその姿を見て、どうにか心を落ち着かせて平静を保つように努力した。
平静を保つようになると、しばしば物思いにふけるようになる。
佐為は、昔ヒカルと出会った時のことを思い出していた。あぁ、ヒカルといぜんにもこのような会話をしたことがあったなぁ、そういえばヒカルはまだ生きているでしょうか。私の感覚が正しければまだほんの十年ほどしかたっていないはず、だとすればヒカルは・・・

―ユウ、今は西暦何年ですか
（なんでそんなこと聞くんだ？へんなやつだなぁ。たしか２０１２年だったと思うぞ）

２０１２年・・・私とヒカルが分かれたのは２０００年ちょうど。ということは、まだヒカルは生きている可能性が高い。彼は今、塔矢アキラとしのぎを削り、盤上の上で戦い、また一段と強くなっていることだろう。
ああ、ヒカルに会いたい、今のヒカルと碁が打ちたい。
と、佐為が物思いにふけっている最中、ユウはテストに悪戦苦闘していた。
やべぇ、俺歴史と国語はからっきしだめなんだよなぁ。まだ１０問も解けてない
これじゃ、絶対小雪の奴にバカにされる。そうだ、佐為ならわかるかもしれねぇ、あぁでもだめだな。
この問題は江戸時代。佐為は平安時代っつってたからなぁ
まあ、いいや、一か八か、聞いてみるか
（なぁ佐為。老中の松平定信が行った改革って知ってるか？）
―あぁ、それは寛政の改革ですね。
（じゃあ、日米修好通商条約結んだ人物って誰だかわかる？）
―井伊直弼様ですね。あの時は皆彼を恨んでおりましたが、いずれは誰かがしなければならない選択を彼が早めに手を打ったというだけのこと。選択の速い竹を割ったような性格の方でした。

佐為の奴、めちゃくちゃわかるじゃねぇか、っていうか江戸に生きてたみたいだ。井伊直弼のことかなり詳しく言っているし。こいつに答えさせたらマジで学年で一桁に行けるんじゃねぇか？でも、ただただ佐為に答えさせるだけじゃ佐為がかわいそうだしなぁ。そうだ、佐為は確か碁が打ちたいって言ってたよな。
よし、そうだ。それにしよう

（なぁ佐為。俺と取引しようぜ）
―取引？
（ああ、お前は歴史と国語のテストを解け。代わりに俺はお前の碁にたまになら付き合ってやる）
―それは、ほんとですかっ！
思わぬ幸運に佐為は喜びを隠せずにいた。佐為の顔が次第に笑顔になっていく。
（ああ、じゃあ後の問題よろしく）
―はい、頑張りますっ！
こうして、３時間目のテスト無事終わった。後日張り出された結果では、見事ユウは１００点を取り、学年１位に輝いた。

○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●

その日の授業が終了し、ユウは小雪に「俺、今日先に帰るわ」と一言告げて、佐為との約束を果たすべく、学校から最寄りの碁会所へと向かった。
碁会所の前についたユウは初めての場ということですこし緊張していた。
しかし、佐為が頭の中で早く、早くと騒ぐので緊張を押し殺して、中に入った。
中に入ると、すぐ正面に受付があり、そこには一人の普通のどこにでもいそうな服装をした中原優香という名札を下げた女の人が立っていた。
ユウは、とりあえず頼れる人が欲しかったため、いち早く受付に向かっていった。
すると、中原も初めて見る顔なことと背が小さいことから初めてくる小学生なのだと判断し、緊張しないようにできるだけ軽い口調で声をかけた。
「坊や、今日が初めて？」

ユウもその優しげな声に落ち着きを取り戻し、「うん」とうなずいた。
続いて中原が
「じゃあ、小学生の間はあっちよ。あ、ここ小学生と初めての人は無料なの。進藤先生が経営されていてね、碁会所ってけむったいおっさんが集まっているイメージが強いだろ。だから小学生とかいきづらいじゃん、それで小学生でも棋院じゃない、気軽に本気で打てる場所が必要だ、とか言って作っちゃったの。まったく変わった先生よね」
その言葉を聞いて佐為はビックリした。進藤ってもしかしてヒカルのことなのか、と。気になって仕方が無い佐為はユウに進藤って名前はなんなのですか、と尋ねるように頼んだ。
中原が優しそうだということもあり、ユウはその頼みを快諾。すぐに中原に進藤という人の名前が何なのかを聞いた。すると、中原は、進藤って言えば、進藤ヒカルじゃない。今2冠を取っているあの進藤名人を知らないの？ほら、あの5冠を取って謎の引退をした塔矢行洋の息子の塔矢名人と小学生のころからライバルだったって言われてて囲碁界の期待の若手2トップス。あなた本当に何も知らないのね。とすこしあきれたように答えてくれた。
ユウは何のことだかさっぱりなので「へぇ」と相槌だけ打つ。
そのことを聞いた瞬間、佐為はとんで喜んだ。
そうかヒカルが・・・あのヒカルがもうプロでそんな事を言われるほどすごい人になっていたなんて。ああ、なんという喜び。ということはヒカルはあの時よりもさらに強くなっているに違いない。テスト中に考えていた今のヒカルと打ってみたいという気持ちがさらに強くなった。しかし、その願いは簡単にはかなわないもの。かつてヒカルといたときに塔矢行洋と戦いたかったのと同じ位置に今、彼はいるのだ。そうなればなんとしてもユウに碁を打たせなければ。佐為が決意を新たにしたところで、中原はユウに「ついてきて、小学生はこっちの部屋なの」とユウを促し、それにユウと佐為も続い

た。

天才棋士誕生

着いた先に広がる光景を見てユウは息をのんだ。
自分と同い年くらいのこどもが真剣に必死になって碁盤を見つめているのだ。碁を全く知らなかった人間からすれば、異常以外の何物でもない光景であろう。さらにそれが横3×縦5で部屋に窮屈にぎっしりと並べられているのだ。こうなってくれば迫力さえでてくる。
これが、囲碁なのか・・・とユウは感嘆していた。
そんなユウの姿は、ヒカルからは見ることのできなかった新鮮なもので佐為も一緒になって部屋の中を見つめた。
部屋について少しした後、中原がしゃがんでユウと同じところまで視線を下げてユウに質問をした
「ねぇ、坊や。棋力はどのくらい？」
「棋力？何それ」
ユウのその言葉を聞くと中原はなるほど、と一言だけつぶやいて部屋の中へと案内してくれた。
「じゃあ、一番奥のあの子と打ってきてもらえる？あ、もしかして棋力知らないってことはルールもしらなかったりする？」
その言葉を聞いてユウは佐為をみた。その視線に佐為は黙ってうなずく。
「ルールは知ってる。大丈夫だよ」
「普通だったら棋力でどのくらいの位置からスタートするのか決めるんだけど、君は棋力がないみたいだからここからね。この部屋勝ち抜き戦形式になっててね、最後一番手前だった子がチャンピオンってわけ。5連続でチャンピオンになると進藤先生と特別に指導碁が打ってもらえるのよ。じゃあ、がんばってね」
そういって、中原は受付の方へと戻っていった。
ユウも指を差された席を目指して歩き出した。
（よし、じゃあ行くか。佐為）

―ええ、必ず、チャンピオンに5回連続なりましょうっ！
(何張り切ってんだ？おれ5日も連続できたくねぇよ)
―そんなぁ・・・・
(今日打てるだけでも感謝しろよ。ほら、行くぞ。)
―はぃ・・・
露骨にへこむ佐為。その姿を見かねたユウは
(気が向いたら明日も来てやるよ。まったくわがままだなぁ、佐為は。)と仕方ないように佐為に言った
すると、佐為の顔はパアと花が咲いたように笑顔になり
―ありがとうございますっ！
と、言ってユウの後を追った。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

ユウが座った席の相手は、小学生でも低学年層くらいの子だった。
こんな小さな子でも碁なんてうつんだなぁ
ユウが席に座ると、その相手の子はいそいそと準備をしだして、ユウが何もしなくても準備は完了した。
そして相手の子が
「僕がにぎるね」と笑顔で言ってくるのでユウも
「あ、うん」と返すことができず、やむなく佐為に（にぎるってなんのことだ？）と聞いて
それが、初めて戦う相手または、棋力が同じ相手の場合に先手、後手を決めるときに使う将棋で言う振りごまのようなものだと知った。
ユウは偶数であると予想し、台の上に二個石を置いた。そして、相手の子が手をパーに広げて、数を数えてみると奇数だったため、相手の子先行で碁が始まることとなった。
そして、お互いに
「「よろしくお願いします」」
と言って碁がスタートした。
相手の子が晩に石を打つパチッという音がユウの耳に響く。

（おい、佐為。相手は子供なんだ。手ぇ、抜けよ）
―わかってますって１７－４右上隅小目
（え？なに右上隅・・・なんていったんだ）
―数字だけを聞いていてください。１７－４はここです。
そういって自分の持つセンスで盤上のある一点をさす佐為。
（なるほどな、今度からはセンスで位置をさしてくれよな）
そう言いながら、パチンッと張りのいい音を出して、石を盤上に置く。
そのうち方を見た佐為は驚いた。
今のうち方はいったい・・・初めての者の手つきではない。
―ユウ、あなた本当に碁を打ったことがないのですか？
（え？ないけど。）
―だって、そのうち方・・・
（ああ、これはさっき一番手前で打ってたの見てかっこいいなぁと思ったからマネしてみただけ。どう似てた？）
にやにやと佐為の方を向きながら自慢げに言うユウ。
その姿を微笑んで眺めながら佐為は思った。
ああ、この子もヒカルと同じように碁の才能を持った子なのだ。打ち方だけでわかる。ふつう見よう見まねでできるほど簡単ではない。まぁ身に着けようと思って身に着けるものでもないが・・・
この子は碁の神様に愛されているのだ。かつてのヒカルと同じように・・・
そんな思いを知らないユウは相手が打ってきたのでそれに対しての手を佐為に聞く。
（次はどうするの？）
―１６－１７右下隅小目
えーっと、１６の１７っと。とのろのろと場所を探しては打つ。それに対して相手の子もまた考えて打つ。
そのような攻防がしばらくの間続いた。
そして、ユウがまた佐為の指示で打ったあと、相手の子の手が急に

止まった。そして、だんだんと顔が険しくなったかと思うと、その直後には吹っ切れたような顔になって、
「ありません」と言った。
また、意味の分からない言葉を耳にしたので、佐為に聞いてみるとそれは相手が自分の負けを認めたということらしい。
相手の子供は言うや否や石を片付けだし、ユウも続いて片付けに入った。
そして、片付けが終わった段階でお互いに
「「ありがとうございました」」と言ってお辞儀をして、ユウは席を立った。
そして、ユウは隣の席へ移動。相手を待っている間佐為と話でもしておこうと思ったユウはそのまま顔を際の方へ見やった。
（なあ、さっきの子強かったのか？）
―ええ、とても強かったですよ。あれが小学生かと思うと将来が楽しみです。
（ふーん。なあ、この際だからちょっとだけ碁のこと教えといてくれよ。さっきみたいのはごめんだぜ）
―教えろ、と言われましても、私の取って当たり前のことがユウにとって知らないこともあるでしょうし・・・
（うーん、それ言われると何とも言えねぇな。まぁ適当に基本的なことと言ったらってやつを教えてくれ）
―でしたら、まずは、ルールですね。
なんとなくわかっていると思いますが、黒が先手白が後手です。次にアゲハマ。これは盤上で相手の石を縦横隙間なく取り囲んだときに取った石のことです。さっきの手合いではありませんでしたが、縦横に相手の石を取り囲んだ場合、自分はその石をとらなければなりません。
あと、まだユウは打たないから心配ないと思いますが、自殺手も禁止です。自分から囲まれたところに行くことを自殺手と言います。
あとは対局時計、これは本当の手合い、例えばプロ試験なんかで使

われます。うーん、ほかには思い当たりませんねぇ
（まあ、じゃあ俺が必要な知識はそれくらいってわけか。わかった、サンキュウな）
ちょうど佐為の説明が終わったところで第二局目の相手が登場した。
今度はユウと同じくらいで小学校高学年くらいの相手だ。
ユウはさっきとは違った機敏な動きで準備を済ませていき
「握って」といって今度は奇数を予想して一つだけを台の上に置いた。相手の握っていた数を数えると９個と奇数だったので、今度はユウが先手だ。
そしてまたお互いに「「よろしくお願いします」」といって手合いが始まった。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

手合いは、どれもあっという間に終わっていき、気が付けばユウたちはすでに一番入口側の列にまで突入していた。
しかし、さすがにどれだけ早く終るからといっても初めて碁を打つユウにはさすがにこれ以上はきついらしく、ここで一度切り上げることにし、席を立った。
部屋を出ると、ユウにとっての自然な空気が漂っており、思いっきり背伸びをした後、受付に向かった。
中原はユウを見るとユウに向かって笑顔で手をふり、「どうだった？コテンパンにされたでしょ？」と聞いてきた。それに対してユウは自分はただ言われた通りに打っていただけだったので大した感想がなかったので「なんだか、すこし物足りない感じ」と対局途中ですこしだけ佐為が漏らした不満をそのまま口にした。
すると中原は、え！？と驚嘆の声をあげた。その声にユウも驚いたが、さらに中原はユウに詰め寄ってきた。
「ちなみに坊や、今日どこまで勝ち上がったの？」
「最前列までは来たと思うけど、それがどうかしたの」

「坊や、お姉さんに初め来たとき、棋力は知らないっていったわよね」
「うん、言ったよ。っていうかそのキリョクってなに？集中力みたいなもの。集中力が高ければ高いほど強い、とかそういうやつ？」
「そんなとぼけちゃって・・・ってあなた本当に棋力のことしらないの！？」
「最初からそう言ってるじゃん」
「驚いたわ、棋力も知らない子があの超小学生達に互角以上に戦ってくるなんて。でもあなた最前列まで来たところでぬけだしてきたのよね」
「うん、そうだよ。」
その言葉を聞いて、すこし自信を取り戻したのか、中原は詰め寄るような体制を普通の立ったままの体制に戻した。
「なら、まだまだね。一番最前列は別格。他の子たちとは全然実力が違う。プロとまではいかないけど、棋院になら一発で入れてもらえるレベルの子ばかりよ。また次来る時を楽しみにしてるといいわ」
その言葉を聞いた佐為がユウに
―その子たちなら、多分、私打ちましたよ。ほら、思い出してください。途中で何局か直々に申し込まれた試合があったでしょう？あれ、彼らでしたよ。確かに彼らはすこし厳しい手を打ってきましたねぇ。でもまあ、小学校の塔矢アキラよりも数段よわかったですけどね。あっという間に終わっちゃったじゃないですか、と誇らしげに言った。
（塔矢アキラ・・・どっかできいた名前だな。まあ今はそんな事どうでもいいや。今日はもう打てる気がしねぇ。ばれねぇうちに帰るぞ。佐為。それにお前なぁ、ちょっとは手加減しろよ。なんでそんな本気で打ってるんだよ。そんなことするから、こうしてからまれるんだぞ。俺は初心者。そんなに強い人間じゃない設定なのっ！）
―はい、反省してます
（今後、こんなことはないように、何回かに一度は負けてくれよな）

―そんなことしたら、ヒカルと碁が打てないじゃないですか
（お前、どうしてそんなに進藤名人と対局したがってるんだ？って
この話はあとでにしよう。ここにいるといずれその佐為が強い人た
ちも倒しちゃったってことがばれちまうからな）
「じゃあ、お姉さん、俺帰るよ。今日はすこし対局しすぎて疲れち
ゃった。」
「うん、じゃあね。また来るのを待ってるわ。次の相手は覚悟して
おきなさいよ」
その言葉に曖昧な笑顔を返しユウと佐為は碁会所を後にした。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

ユウが碁会所を後にした後、中原のもとへ、中原が別格と呼んでい
る男の子たち４人がやってきた。
「あら、あなたたち。どうだった、新しい坊やは。あれはかなり強
いわよ。あなたたちも覚悟しておかないとね」
中原の言葉に４人の中で一番女の人に近かった男の子が顔を俯けな
がらいった。
「中原さん、俺たち、あいつにもう負けたんだ」と
そのことを聞いて、中原も
「なんですって！」とさっきよりもさらに大きく驚き、まるで雷が
落とされたように固まった。
すると、また別の男の子がしゃべりだす。
「あんまり強い強いってみんなが言うからさ、俺たちちょっとした
合間を作って打とうぜって言ったんだ。そうしたら
あっという間に・・・」
「いったい何者なのかしら。彼、棋力のことも知らないのよ」
彼女の言葉に４人全員が
「「「「えぇっ！」」」」
全員が一斉に驚く。てっきり、院生かなにかだと思っていたのだか

ら無理もない。
「これは、進藤先生にも連絡しておかないといけないわね。この碁会所に天才が来たと」

ヒカルとの思いで・・・

碁会所を出た後、ユウ達は寄り道することなくまっすぐ家に帰った。家に帰った後、ユウは親にただいま、とだけそっけなく言って自分の部屋へと向かった。

部屋に向かってまずユウは自分専用のノートパソコンを開いた。次のテストで一桁に必ず入るという条件付きで買ってもらったのだ。逆に一桁に入ることができなかったら、パソコン没収はもちろんのこと、一年間すべての洗い系（風呂洗い、皿洗い、洗濯物など）はすべてユウの仕事になるのだが、苦手教科である歴史と国語が１００点をとれるのだ。正直そんな条件、ユウにとっては痛くもかゆくもなかった。

そのパソコンを見た佐為は

―それは、いつぞやの碁の強い箱ではありませんか。それにしても、以前見たものとは違い薄いですねぇ

（へぇ、佐為、お前パソコンで碁打ったことあるんだ。これを買ってもらえたのはお前のおかげと言ってもいい。好きなだけ使ってくれ）

―それは本当ですかっ！ユウ。以前ヒカルにやらせてもらっていた時は、少し話題に上ってしまっていろいろありましたからねぇ。それに塔矢行洋とのあの一局。あれは私のかけがえのない思い出となりました。またあのような者たちと碁が打てるなんて、考えただけでもわくわくしてきました。

その言葉を聞いたユウが、何かを思い出したかのように、「あ、そうだ」という。

（お前、進藤名人のことやたら気にしてるけど、なんなんだ？なんかあったのか？）

―そういえばユウにはまだ話していませんでしたね。いいでしょう。お話ししましょう。
以前、私が身を宿していた男、進藤ヒカルとの思い出を・・・

（うん・・・ってええぇぇっ！お前、昔は進藤名人に憑りついていたのか。なるほどな、だからやたらと進藤名人のこと聞きたがってたわけだ。それに指導碁も・・・）

―はい。ヒカルとの出会いはあなたと同じような感じでした。ヒカルのおじいさんの家の倉庫の碁盤に宿っていた私に
ヒカルが気づいたのです。

（まあ、似てるっちゃ似てるな）

―それから、彼に私は碁を打たせてほしいと頼みました。彼は宿題をするならという条件で私に碁を打つことをさせてくれると言ってくれたのです。
それから、私たちは、ある碁会所へと向かいました。そこで出会ったのが塔矢アキラです。

（塔矢アキラ・・・あぁ、思い出した。あの進藤名人と期待のツートップスって言われてるあの）

―そうです。私は塔矢アキラと碁を打ちました。彼がまだ小学生の頃です。しかし、その強さはあのヒカルが作った碁会所にいるメンバーでもはが立たないでしょう。それほどまでに彼は圧倒的な力を

持っていた。

（ってことは、お前、負けたのか？だっせ～１０００年以上生きてるくせに小学生一人にもかてねぇなんて）

一人で大笑いをするユウ。それにいらっときた佐為は頬を膨らませながら

負けるわけないじゃないですかぁぁぁ。あなたこそ、私の１０００年をなめ腐っていますねぇと怒って暴れた。そしてすこしの間ユウの大笑いと佐為暴走が落ち着いたところで佐為は再び説明を続けた

―私はその碁に勝ちました。それから彼はヒカルに執念を燃やしていた。多分、負けたことが悔しかったのと同時に疑問だったのでしょう。どうしてこんなやつに負けたんだ、と。

（え、じゃあ、進藤名人ってその時碁のこと、俺と同じで知らなかったの？）

―ええ、まったく。ほんと、あなたとそっくりですね。ユウ

センスを広げ口に当てて、微かに微笑む佐為。そんな佐為にユウも冗談交じりに

（一緒にすんじゃねえよ。俺は俺だ）と言い返した。

それに佐為も―そうですね、とだけ言って再び説明へと話を戻す。

―そして、再び塔矢アキラとの対局。あの時、私は彼を完膚なきまでに叩きのめしました。

それからです。ヒカルも碁に興味を持ち始めたのです。私が打ってるのを見て、楽しそうに思ったんでしょうかね

そんなあるとき、ハゼ中という中学校の文化祭に行った時でした。

私が碁の出し物をやっている場所を見つけて、ヒカルにそこへ行ってもらったのです。

（それで？）

佐為の話に興味を持ったユウは、どんどんいすから身を乗り出して佐為に話を早くしろと促す。

―そこでは、詰碁というものをやっておりその詰碁を解いたら景品がもらえるということで、私たちはそれを解きました。そして、最後の一問を解こうとしたときに一人の不良男、加賀に出会いました。彼は、私たちが解いてきた中で一番難問であったその問題をいとも簡単に解いてしまったのです。

（お前、手こずったのか？）

再び、にやにやしながら、尋ねるユウ

―そんなわけありません。あんなもの私の手にかかれば一瞬で解けます。そして、ヒカルは、その男につっかかっていきました

なにすんだよ、と。それで、ヒカルのある言葉がきっかけでその男と対局することになったのです。

（不良なのに、碁が打てんのか、それはそれですごいけどまた、どうせかったんだろ？）

―いいえ、負けました

思わずずっこけるユウ

（負けたのかよっ！おまえ強いのか弱いのかよくわかんねぇな）

―あれは、ヒカルが打ち損じをしたからです。決して私のせいなどでは・・・あったかもしれません。私はあの時ヒカルにまだいけると言ってしまったのですから

（それで）

―その、碁を終えた後、加賀はヒカルに中学生の囲碁大会に出るように言いました。

（今更だけど、お前今進藤名人のいつの時代のことしゃべってるんだよ）

―あ、言いませんでしたか？小学生。ヒカルが小学６年生の時の話です。すいません、何分慣れてないものですから。

（いや、待て待て、なんで小学生の進藤名人が中学生の碁の大会になんて出るんだよ。お前、その加賀っていう人に負けたんだろう？）

―はい、確かに負けました。しかし、彼は私の強さを見破ったのでしょう。

そのことが、今になって考えてみれば威張れることだと思ったのか、妙に胸を張って鼻を高くする佐為

その姿を見たユウは、威張るな、負けたくせにと鋭く突っ込んだ。

そして、再び思い出の回想へと入る

―それで、その大会で、ヒカルはその生まれながらにして持つ才能を発揮することになります。

ヒカルはある一つの碁を見ていました。そして、その碁の石の位置がごちゃごちゃになってしまいました。そこでヒカルが、俺、並べようかといって全部の石をいったん端に寄せて一から全部何手あったでしょうか、５０手くらいを最初から並べてみせたのです。

（すげぇ、やっぱり俺とは頭のつくりがちげぇんだな、うん）

―そんなことはありません。ユウ、あなたはうちかたがきれいです。

（打ち方くらいだれでも・・・）

―いいえ、それがすごいのです。ユウ、あなたは・・・

これから説教が来ることを予感したユウは

（あああああぁぁぁぁ、もうわかった、わかったから、お前と進藤名人の話の続きを聞かせてくれよ）と言って話を逸らした。実際、話の続きが聞きたかったのも確かだ

―おっと、そうでした。その碁を並べてしばらくした後に大会が始まりました。その大会、ヒカルは初めて自分で碁を打ちました。結果は散々でした。でも、ヒカルにとってはとてもいい経験だったと思います。最後の方は結局私が打ちましたけどね。
それから、小学校を卒業して、ヒカルはハゼ中の囲碁部・・・もどきに入部します。

一瞬詰まる佐為。そのことに間髪入れずにヒカルが突っ込む。

（なんだよ、囲碁部もどきって。もしかして、ハゼ中には囲碁部なかったのか。大会でてたのに！？）

―それは、ヒカルが出てようやく人数がそろったのです。二人では部は作れないでしょう？それに一人は囲碁部ではなく、将棋部ですし

（なんだよ、それ。まあいいや、それで）

―ヒカルはその囲碁部もどきで碁を打つのですが。そこで再び塔矢アキラの登場です。彼は、実力が高すぎるため、アマの手合い、つまり中学生の大会なんかにはでてはいけないと、そう親に言われているのです。
だから、塔矢アキラはヒカルが囲碁部に入ると言ったとき、すごく驚いていました。そして、ヒカルも、もうお前とは打たない、そう塔矢アキラに言ったのです。

（なんで？）

―ヒカルはもうその時すでに、囲碁に目覚めていたのです。いつか私のように強くなって、そして、そうなったとき、再び塔矢アキラと打とうと、そう思ったのです

（なるほどなぁ、進藤名人もすごい人だけど、塔矢名人って人もやっぱ子供のころからすごかったんだな）

―それから、しばらくして、一人囲碁部もどきに入部者が現れます。彼の名は、三谷。そして、３人そろった囲碁部は再び大会へと出場することになります。
そしてなんとその大会になぜか、塔矢アキラが出ていたのです。ヒカルも私もあの時は驚きました。どうやら彼は、よほど私と戦いたかったようです。それにヒカルも初めはアキラの望みに答えるために私に打たしてくれる気でいました。

しかし、対局が始まってしばらくしたとき私が長考している間に、ヒカルは何か思ったのでしょう。自分で打ち出したのです。しかし結果は・・・

（負けたんだな、それもボロボロに）

―そうです。ヒカルは悔しくて泣いていました。そして同時に勝った塔矢も泣いていました。悲しかったのでしょう。自分がここまでして追ってきたものがこのようなものだったことに
そして、その対局をきっかけにしたのかは知りませんが、彼はその年のプロ試験に出て、プロになります。

（ええっ！塔矢名人ってその時まだ中学生なんじゃ）

―はい、別にプロになるのに年齢制限の上限はあっても下限はありませんから
それから、ヒカルも対局に対局をかさね強くなっていきある時、院生に行くことを決意します。

（院生？）

―プロになるための塾のようなものです。
そして、ヒカルは合格して院生となります

（院生って試験あんの？）

―はい。私も試験があるとははじめ思っていませんでした。それで、院生となって、ヒカルはまた別の仲間の伊角や和谷に出会います。
そして、一年後ヒカルもプロ試験を受けます。

（どうせうかったんだろ？）

―ご名答。受かりましたよ。でも大変な苦労があったんですからね。

（まじかよ、すごいな）

―プロになったヒカルは、まずプロになったら必ず行われる新初段シリーズというので塔矢アキラの父、塔矢行洋と対局することになります。

（塔矢名人のお父さんもつよかったの？）

―私と同じか、それ以上に

（へぇ）

―私はそこで、わがままを言ってしまいます。塔矢行洋と打たせてほしいと。当然プロになったヒカルには自信もありますし、売ってみたいという気持ちもあったでしょう。ですが、私はどうしても打ちたかった。

（どうして？）

―私はヒカルがプロになったときから感じ始めていたのです。私の中の止まっていた時計が動き出したことに

（へ？なに、どういうこと）

―１０００年も幽霊として私が存在する理由ができ始めてしまった、と言ったところでしょうか。つまり、時間が進んでいくなかで人間

が永遠に生きられないように、時間が止まり永遠だと思っていた私の時計も動き出してしまったのです。

（まあ、つまりは消える予感がしたってことだな）

―だから、私はわがままを言って、塔矢行洋と打たせてほしいと頼んだのです。最後の最後でヒカルは折れてくれて私に打たせてくれた。でも、中押し勝ち以外認めないという高度な条件付きで

（それで、かったの？）

―急ぎすぎて負けました。勘のいい男です。私が誘っていることを見破ってゆっくりと構えて打ってこられましたからこちらに中押しできるすべはありません。

（そっかぁ）

―そのあとも、私はできるだけヒカルに指導をと思いましたが、ヒカルは相手にしてくれませんでした。
そんなとき、塔矢行洋が心筋梗塞で倒れたのです

（えっ！その人って佐為のことコテンパンにした人だよな、だいじょうぶだったのか？）

―はい、幸い命に別状はなかったそうです。でも安静を取って一週間は入院でした。そして彼は入院している間ひまだからということでネット碁を始めます。
そして、それを知ったヒカルが、この前条件をだしたことを悪く思ったのか、ネット碁で勝負したい友達がいるといって私のことを言

ってくれたのです。あの時は本当にうれしかった、と同時に悲しかった。
そして、ヒカルに気を遣わせている自分が許せなかった。
そして、本当の塔矢行洋と私の勝負が始まります。

（で、結果は？）

―私の反目勝ちです。そしてそのあと、私は消えました。多分、私の最後の役目というのが塔矢行洋との戦いをヒカルに見せることだったのだと思っています。

（なるほど、これでようやく見えてきたぜ。進藤名人のことも、塔矢名人のことも、それにお前のことも。んで、お前は進藤名人にあいたいのか？）

―はいっ！是非

もしかしてと期待に胸を膨らませる佐為。顔がだんだんにやつく。
その状況にユウもニィと笑い

（俺も、進藤名人に興味が湧いた、取りに行くか、５連続チャンピオン）と答えた。

―はいっ！ありがとうございます。

両手を上にあげ万歳の構えを取って大喜びする佐為。

（あ、あと佐為）

―何でしょう？

（今回、お前が消えることはない）

―どうしてですか？

（俺はどれだけ頑張っても囲碁に興味がもてんっ！）

―それは、それで悲しいです。

ヒカルとの思いで・・・（後書き）

ヒカルの碁の説明、要約がへたくそでごめんなさい。

次の日、授業が終わった後ユウは昨日と同じ碁会所へと向かった。中に入ると、昨日と同じ受付の女の人が今日は妙にピシッとしたスーツ姿で迎え入れてくれた。

「いらっしゃい、やっぱり来たわね。どうしてあの上のメンバーの子たちに勝ったこと教えてくれなかったの？」

やっぱりか、と思いつつユウはアハハと苦笑いをしてごまかした。

「そんな事よりさ、お姉さん、どうして今日はそんなスーツ姿なの？」

「あ、これ？これはねぇ、今日、あの子供部屋に棋院の人たちが来ていてね、特別対局をやっているのよ。いちおうこれでも私は受付だからね、さすがにそんな人たちがくるのに私服もダメかと思って。一応ここ結構いい建物だからスーツ着てても普通に思えるでしょ？」

そういって立って全身をユウに見せる中原。しかしユウはそんなことには目もくれないでただ一つのこと、棋院の人たちのことを考えていた。

「ねぇ、その棋院の人たちって俺でも対局できるの？」

「ええ、できるけど。あなたはダメ。今日、あなたはに特別な人に呼ばれているんだから」

「特別な人？」

同時に佐為も―特別な人？と二人してはもりながら同じことを口して、首をかしげた。

「そう、特別な人よ。こっちに来て。案内するわ」

そういって始め来た時のように今度はまた違う部屋へと中原はユウを案内した。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

「ついたわ、この中で少しの間待ってて」
そういって中原が案内した部屋はどこからどう見ても、進藤ヒカルの個人部屋だった。
プレートにご丁寧に進藤　対局室と書かれている。おそらくは進藤名人がだれかと打つ時に使う部屋なのだとユウは思った。
「ねえ、もしかして、特別な人ってもしかして・・・」
「そうよ、進藤名人よ」
笑顔でそう答える中原。その答えを聞きユウも
やっぱり、こりゃ思わぬラッキーだとユウは心の中でガッツポーズ。
佐為もユウの周りでワーイワーイと大はしゃぎしていた。
「私が、棋力をしらない天才小学生がいるって言ったらその子と一度打ちたい。きたらぜひ俺の部屋に招待して、俺に連絡をくれ。できる限りすぐに向かうってすごい勢いでいうの。よかったわね。ふつうそんなことありえないのよっていってもあなたもかなりありえないけど」
苦笑しながら言う中原の言葉に佐為は
―もしかしたら、ヒカルは私のことに気付いているかもしれません。
と言い
ユウも（ああ、そうかもしれねぇな。）と答えた。
「それじゃあ、連絡してくるから」といって中原はいったん部屋の前を後にした。そしてユウ達はへやの中へと入った。
中に入るとその部屋の中には、いくつもの賞状と、優勝カップがあり、真ん中に居座るように碁盤が鎮座していた。
「すげぇ、これが進藤名人の部屋かぁ。こんなに賞状が、なあ見てみろよ佐為。この進藤名人のうれしそうな顔。なんかどれをとってもおんなじようにその時の最高の笑顔ってかんじだよなぁ」
その言葉に答えるように佐為は
―ええ、進藤ヒカルとは、そういう男ですから
と言った。
しばらくの間ヒカルの部屋を堪能していると、連絡を終えた中原が

戻ってきて
「進藤名人、あと１０分で帰るから、お願いだから帰らないでって言っといてだって。なんかすごい勢いで電話切られちゃった。よっぽどあなたと会いたいのね、彼」
その言葉を聞いて、ユウと佐為の予想は確信へと変わった。
ユウは短く「ありがと」とだけ中原に言った。
佐為はもうヒカルと会うのが待ちきれないといったようにそわそわと部屋をあっちへこっちへとせわしなく動いている。
（すこしはおちつけよ）
―だって、もう１０年あっていないんですよぉ。もう楽しみで楽しみで。それにユウだって
確かにユウも昨日の話で少なからず進藤名人に興味を持っており、落ち着いてはいられなかった。
そんなユウの姿を見た中原は
「あなた、ずいぶんとそわそわしてるわね。まあ、そりゃ名人に声かけられるなんて普通じゃないものね。じゃあ、私は受付に戻らなきゃならないから。ゆっくりとまってなさい。」
そういって再び中原は受付の方へと戻っていった。
その後の二人はもう進藤ヒカルのこと以外何も考えられないかのようにそわそわとし、そして待った。
ちょうど１０分ほど経過したとき、ドアが開く音がした。
そして、そのドアの向こうから、身長は１６０?後半くらいの大人の男性にしては若干低めの身長で、髪型は少し変わった前髪は金髪、後ろ髪は普通の黒という賞状やトロフィーと一緒に飾られていた写真に乗っていたその男が姿を現した。
あらわれるや否やすぐにユウのことを指差して
「お前か、棋力もしらない状態であの小学生たちをコテンパンにした天才小学生っていうのは」といった。
さすがのユウも大の大人、それも話には聞いていても初めての相手だったこともあり、かなり緊張して

「は、はいっ！」とすこし張り切ったような声を出した。
その傍らで佐為は
―おー、ヒカル大きくなりましたね。でも私の方がまだ身長は上ですね。それに声もだいぶ低くなりましたね。
と大はしゃぎ、心は興奮状態なのだとユウは思っていた。しかし佐為は心の中で、やはり私の姿はもう、ヒカルの目には映らないのですね、とひそかにまだ見えるのではと思っていた期待が裏切られて悲しい気持ちにもなっていた。
「そんなに固くなるなって、な。逆に俺が堅くなっちまいそうだよ。そうだ、菓子食うか、一応と思って買ってきたんだけど、どれが好きかわかんなくてさぁ、ポテチとか、好き？」
一瞬、あまりのノリの軽さに驚いたユウだったが、彼の少年時代を佐為からあらかじめ聞いていたおかげで、案外すんなりとうけいれることができ「あ、よく家で食べます」と普通に対応することができた。
その言葉を聞いてヒカルも心底安堵したように胸に手を当てふぅと息をつき「良かったぁ、なんか最近の子供の趣味とか俺時々わからない時あるからさ、もしかして嫌いな子だったらどうしようって思ってたんだ」と自分の気持ちをユウに話した。
ユウも、その進藤のノリの軽さにすっかり緊張もほぐされ
「いや、それは明らかに進藤名人じゃなくて、そのこどもの味覚がおかしいでしょ。ハハハハ」とすっかり普段の調子に戻った。
すると、ユウのある言葉に引っかかったヒカルがすこしひきつった顔で
「あ、俺のことはヒカルでいいよ。いやならヒカル君でもヒカルさんでもかまわねえ。俺もお前のことはえっと・・・」
「あ、早坂ユウです」
「俺はお前のことはユウって呼ぶ。だから
その進藤名人っていうのだけはやめてくれ。それが嫌で俺は本因坊戦も王座戦も調子狂うんだよ。これ勝ったら進藤本因坊とか言われ

たらってそうぞうしたらぞくぞくしちまって」
その言葉を聞いた佐為が
―こら！ヒカル。そんなことで集中力を切らしてどうするんですかっ！冗談、それは冗談なんですよねっ！
とヒカルの後ろでかんかんになって怒っていた。しかしその言葉はヒカルには届かない。
佐為がそのようなことを自分の後ろでしていることすらも知らない。
佐為は怒っていてさらにさみしさを感じた。
そのことをよそにユウとヒカルは話のうまがあったのかどんどんと盛り上がっていった。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

しばらく話で盛り上がったあとにふとヒカルがユウにこんなことを聞いてきた。
「ユウは、最近霊がみえるようになったとかそういうのない？」
その言葉を聞いたとき、ユウは来たっ！と思った。会話で盛り上がりつつすこし思っていたのだ。
その質問にあらかじめ考えておいた答えで返す。
「いますよ。あなたの後ろに。あなたの探している霊が」
その言葉を聞いて一気に後ろに振り向くヒカル。その顔を見て
―おーいヒカル私はここですよ、と手を振る佐為。しかしヒカルにそれはやはり見えない。ヒカルははぁ、とため息をつきもう一度ユウの方に振り帰る。
「じゃあ、お前もしかして・・・」
「はい、見えます。藤原佐為という、平安時代の碁打ちの霊が」
「やっぱりそうか、なんとなくそういう気がしたんだよ。棋力をしらずにあの小学生を一騎当千するなんて、アイツでもいねぇと無理

な話だ。でも残念だな、もう俺にあいつは見えねえんだな。まだ後ろにいる？」
「ええ、いますよ。今も必死にヒカルさんに泣きついてます。どうして私のことが見えないんですかぁヒカルぅって」
手を使って佐為の状態を冗談半分で再現するユウ。
それにヒカルも軽くフッっと笑った。
「あいつらしいな。なあ、打たないか。一度俺と」
「佐為とですか？いいですよ、」
「いや、佐為には悪いけど今回打つのはお前とだ、ユウ」

目覚めるユウの才能

「打つのはお前とだ、ユウ」
ヒカルは知りたかった。どうして佐為が自分ではなくユウの前に姿を現したのか。どうして佐為の存在を知ってなお自分は佐為のことが見えないのか、というより、なぜ佐為は再びここへと戻ってきたのか、その答えがユウと碁を打つことで答えが出ると思った。
「いや、でも俺、全然、碁なんて知らないし・・・」
ユウは佐為と出会って初めて碁を知ったような自分にまだ打てるわけがない。そう思って必死に止めようとした。
最悪だまって佐為に打たせてもいいか、と一時はそう考えたが佐為に―ヒカルなら私が打っていたら一発でばれてしまいます。といわれてしまいさらにその思いは強くなった。
しかし
「いいから打てっ！・・・・・・いや打ってくれ」
知りたいと焦る気持ちが前にでて思わず荒い言葉がヒカルの口から出てしまう。
その態度にユウもドキッとして硬直した。
しばらくの沈黙が続いた。
初めに沈黙を破ったのは佐為だった。
―ユウ、ヒカルと打ってあげてくれませんか？
（でもよぉ、俺ほんとに碁なんて昨日初めて打っただけだぜ。それにまだルールとかも全然しらねぇし）
―大丈夫です。その辺はヒカルもわかっているはずです。
（そうかなぁ）
―そうです。大丈夫。ユウならできます。
（ほんとか？ならやってみようかな。でも負け勝負をするのって気持ちいいもんじゃないぜ）
―なぜ負け勝負だと思うのですか？

（そんなもん、向こうは現役でプロしてる。しかも期待のツートップスとか呼ばれてるくらいの強者なのに対して、こっちは昨日初めて打ったような新参者だ。勝てたらそれこそ俺は天才だ。）
―じゃあ、天才であることを証明するためにも、一度。ほらっ、はやく
今まで自分が座っていたところからせっせと動き盤上をセンスでさす佐為。
本当は自分が打ちたいはずなのにどうして・・・とすこし暗いきもちにはなるもののあまりに無邪気にホラホラといって手を振る佐為のその姿に苦笑しながらもわかったよと打たないことを諦め打つことを決意した。
「打ちましょうか、ヒカルさん。でも俺昨日初めて碁を見ただけなんであんまり期待はしないでくださいよ」
「わるいな、無茶言って。」
「いえ、せっかく期待のツートップスの一人と打てるんですからこっちとしては光栄ですよ」
そういって二人は真ん中に鎮座する盤上へと足を運んだ。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

「置石はいくつがいい？好きなだけおいてくれ」
その言葉を聞いた瞬間佐為はしまったぁといった様子で縮こまった。教えていなかったのだ。どうせ自分が打つからそんなものはいらないとそう思って。
そんな佐為をユウは一瞬睨み付けた。教えてくれなかった佐為には聞くまいとヒカルに聞くことにした。
「あの、置石って・・・」
「ああ、置石っていうのはハンデのこと。最初からいくつか置石を置いておくとちょっとは勝ちやすくなるだろう？」
「なるほど、じゃあ、ココと、ココと、ココにっと」

そういってユウが置いたのは右上隅の小目、左下隅小目、そして左下桂馬という風においた。昨日最後打った局で佐為の初めの三手を再現したのだ。
それを見たヒカルは苦笑しながら
「ごめん、説明し忘れてたな。置石っていうのは基本置く位置が決まっているんだ。」とその三つの置石を本来おくべき位置へと持って行った。
その姿にユウも小さく「スイマセン」と謝った。
置石３つをすべてしっかりとした位置におきおえてヒカルが
「三つでいいの？」と尋ねたが
ユウはこれでも多かったかなと思うくらいで
「もう十分です。」と言って準備完了。
昨日と同じようにお互いに「「お願いします」」と言って碁が始まった。
碁が始まった瞬間、ヒカルの目は真剣な目へと変わり、盤上へと注がれだした。
そして、はじめの一手をうつ。
その真剣な表情を見たユウは自分もやれるところまでだけやってみようと思い次の一手ヒカルの置いた右上隅の小目の位置につけるようにして石を打つ。
そのうち方を見た瞬間、ヒカルの手が止まる。今のうち方は・・・こいつ、ほんとに碁を打つの初めてなのか？と疑問に感じていた。しかし、ヒカルはその疑問を振り切るように頭を振る。ダメだ、今は対局に集中しなければと再び盤上に目をやり次の手を考えた。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

しばらくたって、中盤に入ったとき驚くことにヒカルはユウにかなり苦戦していた。
なんなんだ、ユウのこの碁は。このうち方、佐為の力を借りてると

も思えない。でもなんだろう。こっちの動きはすべて見透かされているような、そんなうち方をしてくる。
自分が打とうとしているところを徹底的に潰してきている。これでもか、と見ている人にとっては意外だろうというようなところに打っても、それを読んでいたかのように次の一手は俺の展開を邪魔するようなところをついてくる。
しかし、強いかと思うとそうでもない。ただただ止めているだけだから、こっちにとっての痛手はない。
そのうえ、二重に張り巡らせた策には案外簡単に引っかかる。だから強いかと言われればそうとも思えない・・・・。
もしかして、こいつ。盤を見ているのではなく、俺の心を見て打っているのか。
その瞬間ヒカルは恐怖を覚えた。
そして冷や汗が出た。もしそうなら、自分は確実に近い未来にユウにやられる、そう感じたからだ。
次の一手をヒカルが打つ。またヒカルが思っていたような展開にさせないような位置に打たれる。
一体こいつは・・・・
またヒカルは次の手を考え込む。
そんなヒカルの苦悩を知らないユウは
何をそんなに考える必要があるんだろう。俺なんてまだまだ初心者だし、赤子の手をひねるも同然のような弱さなはず。でもなんだろう、なんでヒカルさんの打つ碁はこんなにも近くに感じるんだろう。
・・・・・・・そうか、佐為か。昨日の佐為のうち方と一緒なんだ。どの手も、佐為が打つ一手と同じなんだ。
だからなのか、すべてが見えてしまう。ここに打つだろうというヒカルさんの手の内が。ヒカルさんの考えが碁盤から伝わってくる。ココに打ってやろうという気持ち。昨日佐為が打っていた時も時々そんな感覚に襲われた。途中何度か自分でも打てるんじゃないかと思うぐらいぴったりとあてはまる手だった。

なんだか、面白くないや。
別に自分の力を過信しているわけではない。ただただ純粋に面白くないのだ。
碁という石打ちが
一方後ろから見ていた佐為もこの碁を食い入るように見ていた。
この子はいったい何者なんだ？ヒカルの手は私がいる時とは比べ物にならないくらいの光る一手ばかり。
だけど、この子はそんなものへでもないかのように、当たり前のようにすべてを返す。
何もかもが圧倒的すぎる。全てが見えているんだ、この子には、まさに答えの書いた問題用紙のように
考えに考えたあとにヒカルが打った手にたいしてまたユウが打つ。
しかし、ユウもまだまだ初めてなこともあって完璧ではない。
今度もまたヒカルの石の道をふさぐ。しかし、ヒカルもユウの手をさらに深く読む。このルートをつぶしに入ったらこうなるというさらに上の道を。そして次の一手で一つをまた自分のアゲハマにする。
さすがにヒカルもただただ負けてるわけじゃない。もしかしたら、今の私では勝てないレベルに来ているかもしれない。また一つも二つも成長しているのですね、ヒカル。
しかし、いったいこの子は何者・・・？
その時ユウは、また一つ予期せぬところでアゲハマにされてしまったので
「マジでっ！」と驚きの声を上げていた。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

対局は大詰めを迎え、ヒカルがまた次の一手を繰り出す。
それに対してユウもその道をふさぐような位置に打つ。そして終局を迎えた。
目算を始める。結果はヒカルの3目半勝ち。

石を片付けて互いに「「ありがとうございました」」といって対局は終了した。
ヒカル達に圧倒的な天賦の才を見せつけて・・・

俺はもう打たないっ！

「いやぁ、やっぱりかなわないですね。さすがは名人です。」
ユウは右手を頭の後ろにやりながら、率直な感想を述べる。
すると、ヒカルは
「なあ、佐為。お前はどう思う？」
―っ！！！
あまりの突然なことに佐為もすぐに対応できない。それどころか固まって動けない様子。
やっぱり、ヒカルには佐為が見えているのでは、とユウはおもい、すぐに口にした。
「あの、ヒカルさん、やっぱり佐為のことみえてるんですか？」
すると、ヒカルはアハハハと苦笑した。
「いや、見えてねぇよ。ただ呼びかけただけ。ここにいるんだろ？なさけねぇな、大の大人だっていうのにまだ子供のころの恩師がわすれられねぇんだから。」
もう一度かすれた笑いをするヒカル。
ヒカルに呼ばれた佐為も、残念そうにため息をついた。
「今日はありがとな、わざわざ俺に付き合ってもらって。お前超強いぜ。まあ、お前の強さは相手が強ければ強いほどっていう強さだからあの小学生たちにはつうようしないだろうけど、少なくとも俺は大苦戦だったぜ」
無理やり作ったひきつった笑顔で、ユウにそういうヒカル。極力困らせたりはしたくない。
もう、佐為はユウのもとにいるのだ。自分がとやかく言うべきではない、そう思ったからだ。
しかし、ユウにとっては逆にそれがつらかった。だからと言ってユウがヒカルや佐為にしてやれることなど一つもない。
もし、自分が佐為の言葉を伝えたって自分がいればやはり佐為と腹

を割った話はできないだろう。
どうも、佐為のヒカルさんとの別れのシーンを聞く限り、あんまりいい別れ方はしていない。
ぱっと消えたといった感じだった。なにかとヒカルさんは佐為に言いたいことがあるだろう。
だけど、自分にはなにもできない。それが歯がゆかった。
畜生、なんで俺なんだよ。なんでヒカルさんのもとにもどらねえんだよ、佐為・・・。
しばしの沈黙が訪れた。
その間ずっとユウはどうにかして、佐為とヒカルが話せる場を作ろうと考えた。
そして、一つの答えに行きついた。
「ヒカルさん、佐為と話したくないですか？」
「そりゃ、話したいけど・・・」
「俺に言い考えがあります。交換日記みたいなものです。俺は佐為の言ったことをそれにそのまま書き込ます。ヒカルさんはそれに返事するといった形で会話していく。これなら、俺も見なくて済むし、二人だけで会話することができます」
「それじゃあ、お前に迷惑が」
「俺のことは気にしないでください。というより、見ていてしんどいんですよ。俺には二人とも見えているんですから。
書くだけの方がよっぽど楽ですよ」
その言葉を聞いてヒカルの顔にだんだん生気がもどってくる。うれしくてたまらない。勝手に消えたこと。そして、このサイのいない１０年間で出会った人々。そして経験。緒方さんから奪ったタイトル。そして、名人になるまでの数々の苦労。そしてなにより塔矢との毎日。あげだしたらきりがない。
気づいたらヒカルは泣いていた。
あふれる涙を止めることができない。
それでも、どうにかして、涙を服で拭い、ユウに頭を下げた。

「本当にありがとう。今日中にノートに書いて用意しとく。」
「頭を上げてください。おれはただ、ヒカルさんや佐為が喜んでくれたならそれでいいんですよ。」
ユウの本心だった。ユウは小さい時からすこしひねくれたところがあり、誰かのためなんていうのは必ず
裏があるとそう思っていた。しかし、今のユウは誰かのためにすることの心地よさをすこしばかり感じた。
「じゃあ、今日は俺、もうかえりますね。明日にノートは取りに来ます」
「いや、俺が届けに行くよ。家どこ？おしえて」
その言葉は、普段通りのノリの軽いヒカルの口調だった。そして、ユウの住む町いったいの地図を床に広げる。
ユウもそのノリのかるい口調をきいて安堵し最初にであった時のような、いつもの感じへと戻った。
「えーっとですね、あ、ココです。多分このコンビニの隣あたりなので」
「わかった。じゃあ、また明日な」
「はい、また明日」
そういって碁会所をユウ達は後にした。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

帰宅した後、ユウは部屋に入ってベットに飛び込んだ。
そんなユウに申し訳なさそうに佐為が話しかけてくる。
―ユウ、本当によかったのですか。
（ん、何が？）
―日記ですよ、日記
（いいって言ってるじゃん。そんなことより、俺は疲れてるんだよ。あんなかんがえたの初めてだったし）
―ユウ、本当に碁、強かったですよ。

（そう？全然実感がない。）
そんなのどうでもいいかのように、そっけなく返す。
―あなたは非常に大きな素質を持っていますよ、ユウ。どうです、
碁を続けてみては
その誘いに、大事なことだと思って疲れているからだをベットから
起こして、佐為の方に向き直る。
（いや、俺はどうやら碁には嫌われてるみたいだ。なんていうか、
気分がよくねえんだよ、打ってても。なんかみんな次の一手を考え
ることに楽しみを覚えるとかいうけど、俺にはそんな特異体質もな
い。ハッキリ言う俺は金輪際碁はうたねぇ！！）
あまりにも衝撃的なことをいわれたために一瞬思考が停止する。
・・あれだけの碁が打てるのに碁に嫌われている？
一体この子はなにをいっているんだ。いやしかし、私がとやかく言
うことではない。感じ方は人それぞれだ。
ココは黙って・・・・ん？碁は打たない？
じゃあ、私も碁が打てないってことになりませんか、それはいけな
い。なんとしても阻止せねば
―ユウ、いいましたよね。テストを解けば私に碁を打たせてくれる
って。せっかく戻ってきたのに碁が打ちたいです。
打たせてくださいよぉ、ユウ
ユウにしがみつく佐為。ユウはその姿にくしょうしながら答える。
（ああ、違う違う。俺自身が考えて打つ碁はしないだけ。佐為には
打たせてやるよ。）と
しかし、自分が打てるといわれてもすっきりと心は晴れない。ユウ
も打つとおもっていたからだ。
あれだけの才能があれば、自分もいずれは・・・そう思うとユウと
うつことともヒカルと打つことと同じくらい楽しみになっていた。し
かし、ユウは打たないといった。
どうにかして、ユウに碁を打ってほしい。なにかきっかけになるも
のでもあるといいのですが・・・

まあ、まだまだ先はあります。その間ゆっくりと見守りましょう。
それにユウは、ヒカルと話す機会をくれた。今はそれだけでも満足ではありませんか。そういって佐為は自分の心に言い聞かせた。
（まあ、そういうわけだから。俺はもう碁はうたないっ！。以上お休み～）
そして、佐為の心は結局諦めきれずもやもやしたまま次の日を迎えた。

ライバルの予感

学校が終わり、2日連続碁会所へと学校から直接通っていたため、ユウは小雪と一緒に帰宅することをすこし久しく感じていた。それは小雪も同じだったらしく、二人してちょっと照れくさく感じていた。

しかし、帰り道をしばらく一緒に歩いていると次第にいつもの調子に戻った。

調子の戻った小雪は、話せるタイミングが来たと思い今まですこし気になっていたこと。ユウがいったいこの二日間なにをしていたのかを聞くことにした。

「ユウ、あんた一体この二日間、どこに言ってたの？」

「ん、碁会所っつってもわかんねぇよな。ほらジーちゃん家で見たあの碁盤覚えてるか。あれで打つ頭使ったゲームするところ。囲碁っていうんだけど、それにいってたんだ。」

「そんなに丁寧に説明されなくても囲碁くらいわかりますぅ。でもどうしてあんたみたいなどうしようもないバカが囲碁なんてしようとおもったわけ」

「どうしようもないバカとはなんだ。テストの成績だって宣言通り学年で一桁にはいっただろうが」

「あんなのまぐれに決まってるじゃない。次は絶対に無理よ。絶対にね」

「なにっ！俺だってやりゃとれるんだよ。簡単にな。テストなんてチョロいぜ」

「なーにがチョロいよ。あーあーやだやだ。いっかいまぐれで入ったからっていい気になっちゃって」

「なんなら、まぐれじゃねぇってこと、証明してやろうか。そろそろまたテストがあるだろ。それでもまた学年一桁に入ってやる。それならみとめるだろ」

「そりゃ認めるわよ。まあ二度も奇跡は起こらないでしょうけどね。」
「いったなぁぁぁ」
「いったわよ。大体あんたわね・・・・・」
こうなってくるともう、意地の張り合い。囲碁のことなど遠くの彼方へと去っていった。
そうして、この意地の張り合いはユウの家に着くまで続いた。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

家についたユウは玄関で見慣れない靴を目にした。
もしやと思いリビングに駆けつけたところ想像通りヒカルがリビングのソファに座っていた。
ユウの姿をとらえるとヒカルはソファからユウに向かって手を振った。
「お帰り。家についたらユウのお母さんがゆっくりしてけって言ってくれたからすこしくつろがせてもらった。
それにしてもお前、きれいないえにすんでるんだなぁ」
そういわれて、ユウも家の中を見回す。しかし普段見慣れている景色なのか特にきれいだということも感じない。
まあ、まわりからそうみえているならそうしておこうと思い、ヒカルの言葉にアハハと苦笑いで返答した。
リビングにいても、ヒカルさんは落ち着けないだろう。そう思ったユウはヒカルを自分の部屋へと案内した。
ユウの部屋は特に変わったところのない、普通の小学生の部屋と言った感じで、勉強机に、回転椅子、それに趣味の音楽プレイヤーがおかれた現代風と言った感じの部屋だった。
ヒカルはその部屋を見た後、もうすでに自分は爺さんのように「最近の若者はこんな部屋に住んでいるのかぁ」と関心の声を上げていた。

しかし、ヒカルはすぐにここに来た理由を思い出し、自分の持ってきた一冊のノートをユウに渡す。
「昨日一晩中かけて書いた。俺、中学で囲碁の世界にはいったからあんまりそういうのうまくないんだ。だからもしかしたらうまく伝わりにくいかもしれないけど、かんべんな。」
「俺は読みませんから。読むのは佐為です。といっても今もベットにデーンと横になってますけどね。なんだか今朝からちょっと落ち込み気味なんですよ。まあすぐに治ると思いますけどね。」
その言葉を聞いてヒカルはすこしベットに目をやった。やっぱり佐為の姿は見えない。
そのことを確認すると、すぐにユウの方に向き直る。
「じゃあ、俺はそろそろ帰るよ。碁会所の方もたまには覗いてやらないと。」
その言葉を聞いた瞬間、ユウはすこし残念に思った。
もうちょっとヒカルさんとしゃべっていたい。なんでもいい。ヒカルさんとただただしょうもない話をしていたい。
でも、やっぱりヒカルさんは有名人で、囲碁界では、ツートップスってよばれるくらいすごい人で、おれなんてただの小学生だし、今こうしてはなせているだけでもすごいことなんだよな。
別れるのが残念ではあったが仕方が無いと、踏ん切りをつけ、精いっぱいの笑顔でユウはヒカルを見送った。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

ヒカルを見送った後ユウは再び自分の部屋へと戻る。そして、ベットで横たわる佐為に声をかける。
(なあ、どうしたんだよ佐為。お前今朝からずっとそこにいるじゃねぇか。なんかあったのか)
―いえ、そういうわけではないのですが
[せっかくヒカルさんがノート持ってきてくれたのに、ずっとその

ままだし、まあヒカルさんにはお前が見えてないから何とも思われなかったけど、ちょっと失礼だぞお前）
―はい・・・わかっているのですが、どうも力が入らなくて
佐為はわかっていた、どうして自分に力が入らないのか。
昨日ユウに言われたあの言葉「俺はもう、金輪際碁はうたねぇ」という言葉が自分の心に響いているのだということに
今までで、そんなことを言われたのは初めてだった。
自分が身を宿した人物は皆向上心をもち、碁に興味を示していた。
しかしユウは違った。
今まで一緒にいた人の中で一番の才能をもちながら、しかし、彼は碁を嫌っている。
自分が好きな碁を嫌いだといった。いや、碁に嫌われている、か。
どっちでもいい。
碁の何がそんなにいやだというのですか、ユウ。私には理解できませんよ。
―ユウ、本当に碁を打つ気はないのですか？
（しつこいぞ。俺は碁に興味はない。別にお前に碁を打たせないって言ってるわけじゃねぇんだからいいだろう。俺にだって俺の考え方があるんだって）
―でも・・・
（でもも、へったくれもねぇ。ほら、ヒカルさんのノート。これでもよんで返事でもかんがえろ。ホラっ！）
そういって、ユウはヒカルからもらったノート佐為の下へと投げる。
ノートがベットの上にのる。
すると佐為はそのノートを見る。しかし、見るだけでそれ以上何かをする気配はない。じれったくなったユウは
佐為にさっさとノートを取るように促す。すると佐為は
―ユウ、私は幽霊ですよ。ノートを取ることなんてできません。
力のない言葉で短く言い返す。
取ることなんてできない・・・か。開けてくださいとはいわないん

だな。
一体何がこいつにとってショックなんだ？全然わからねぇ
あまりの佐為の落ち込みようにユウも諦めたといった感じでため息をつき、部屋から一人で出て行った。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

「あんたたち、碁、弱すぎ。あーあ、つまんないや。」
とある碁会所の片隅の人だかりの中でフーセンガムを膨らましながら、少年、椎名　春樹は碁を打っていた。
「だったら次は俺と打とうぜ。俺はなんてったって一度アマの世界大会にだって出場したことがあるんだ。おめぇなんて相手にもなりゃしねぇぜ」
春樹のまわりの人だかりは春樹ののすました態度にむかつき、次々と春樹に挑んで負けて人たちでできたものだった。
皆一様に顔つきが怖い。どこぞの不良を思わせるような人たちばかり。いま、話しかけられた相手もお世辞でも真面目な人とは言えない黒いオーラを放っていた。
しかし、春樹はそんなものは何とも思わない。澄ました口調でいつものように相手を挑発しながら新たな対局に準備をする。
「いいけど、ちょっとは粘ってよ。おじさん。」
しかし、その澄ました口調とは裏腹に、眼はもうすでに相手を睨みつけるような鋭さを放った眼へと変わっている。
男もすでに目は盤上に注がれている。そして男が
「じゃあ、始めるぜ」といい
そうして、碁は始まった。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

１０分もかからないうちに決着がついた。

春樹の中押し勝ちである。自分をアマで世界大会に出たことがあるといった男は信じられないといった様子で盤上をみつくしていた。
「まあ、ちょっとは粘った方なんじゃない。」
そうして、再び口に含んでいたフーセンガムを膨らます。
すると、盤上を見尽くしていた男が我に返り、春樹に声をかける。
「おまえ、いったい何者だ」
「知りたきゃ、俺を倒してみな。」
余裕と言ったようすで、足を組む春樹。
すると入口の方から妙に甲高い声が聞こえてくる。春樹はその声が自分の母親のものだと判断。
あまりに唐突にやってきた出来事に思わず春樹も
「やべっ」
と焦りを声に出す。さっきまでとはまるで違う余裕のない表情に男たちは笑った。
「もしかして、あれお前のかあちゃんか?」
一人の男が春樹に突っかかる。その言葉にまわりからゲラゲラと笑いの声が上がる。
しかし春樹のとってはそれどころではない。春樹は焦って鞄を手に取り
「また気が向いたら来てあげるよ」
と、無理やり余裕ぶって見せて、碁会所を母親に見つからないようにこっそり後にした。
そして外に出た後、春樹はボソッっとつぶやいた。
「アイツら本当に弱いよな、なぁ虎次郎・・・・」

対決再び　ヒカルVSユウ

佐為から元気がなくなって一週間が経過した。
しかし、依然佐為は元気を取り戻さずにいた。
まだ、ヒカルへの返事も書いていない。というより、ユウが佐為に近寄らないようにしているのだ。
だから、佐為は読むことができない、という方が確かかもしれない。
しかし、別にユウが行ったからといっても
特に何も行動は起こさないだろう。佐為はただただ、座り込んで、どこか遠くを見つめていた。
ユウは、いったいどうべきか悩んでいた。
俺が囲碁をやるっていったら、たぶん佐為は元気になる。でもあの感覚・・・ヒカルさんと碁を打ってた時に感じたあの感覚はなんか、すきになれないんだよなぁ。
というより、俺もともと囲碁に興味ねぇじゃん。別に普通が好きってわけでもねぇけど、囲碁ってなんか古臭いっていうかなんて言うか。
せめて、ヒカルさんのノートを見せることができたら、でも俺が読むわけにもいかねぇし
「あああああああぁぁぁ」
頭を盛大にかきむしった。
しかし、事態はかわらない。
なにかしようにも、ヒカルさんのところには、ノートのこともあっていけないし、かといってほかに頼る当てもない。
仕方なく、ユウはヒカルの碁会所へと行くことにした。
●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○
碁会所には、運悪く・・・なのか、ヒカルの姿は無かった。
そこで、受付の中原に佐為を友達と言って相談することにした。
「ふぅん、で、その子はまだ元気がないと」

「うん、そうなんだ。いったい何が原因なんだと思う？」
「それはねぇ、嫉妬じゃない。うらやましいのよ、あなたのことが」
「俺のことが？なんで？」
「この前ね、進藤先生が言ってたのよ、俺はユウが本気になったら簡単に負けちゃうかもって。そんな事はありえないにしても、初めて打つ対局であの超小学生を全員たおしたり、実力は確かだと思うわよ？」
それは、その友達が打ったんだけどね。っていってもまあ信じてもらえそうにもないし、まず説明が面倒くさそうなので
そこは流すことにした。
「あなたは異常なまでの才能をきっと持ってるんだわ。だからその友達はきっとあなたのその才能に嫉妬してるのよ。」
ユウは中原の言葉を聞いてすこし考えた。
ヒカルさんと打ったのはまぎれもない俺自身。そのヒカルさんがそこまでいうのにはやっぱりなにか理由があるんだろう。ヒカルさんといえども俺がこんなこと聞きに来るなんて予想はしてないだろうし、とするとやっぱりそれはヒカルさん自身の本心。
最初に3つも石を置かせてもらったうえに負けて、どこに才能があるんだろう。奇跡でもかてたんならまあ才能があるっていうのは認めたけど、完全にまけちゃったからなぁ
ユウが考えていると再びドアが開く音がした。
その音につられてユウは振り返る。いたのはヒカルだった。
「なんだよ、来てたのかよ。ここ一週間全然来てくれないから心配してたんだぜ。さ、奥の部屋に来いよ」
ヒカルのその言葉を聞いた瞬間、ユウはその場からすぐに逃げ出したくなった。
きっとヒカルさんは、佐為の返事を待っている。でも俺は・・・佐為にノートを見せてやれていない・・・
しかし、ユウは逃げたい気持ちをこらえた。佐為の理解者はこの人しかいないのだ。この人にしか自分の悩みは理解できない。そう思

ったからだ。
つまりは、ヒカルへの悪びれる気持ちより、自分のことを優先したのだ。
ユウはヒカルへとついて、奥の部屋へと向かった。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

ヒカルにも中原と同様に今の現状をありのままに話した。
すると、あろうことかヒカルも中原と同様の答えを返してきた。佐為のその行動は自分に対する嫉妬だと
なぜかと聞いた。
すると、ヒカルは笑いながら
「実際に俺も感じているからさ。俺はお前と打っていた時、恐怖さえ感じた。そのあふれんばかりの才能に。囲碁をしているものなら誰だってほしいと思うぜ？」
「そんなの、買い被りですよ。俺はそんなにすごい人間じゃない。ただ前のはヒカルさんが佐為と同じような打ち方をしていたから・・・」
「俺さぁ、お前と打ってるとき不思議なことを考えたんだ。もしかしたらコイツ、俺の心をみて碁をうってるのかなぁって。ビックリするほど俺のてが通用しなくて。全部お前が潰しちまうんだ。」
でも、結果は負け・・・。なにもすごいことなんてない。潰したところで次の手ではやられていた。
「お前にはすごい才能があるよ。心眼？みたいな」
半笑いになりながら言うヒカル。
しかし、ユウはなおも才能がすごいというヒカルの言動が気に入らなかった。
どうして、みんなして・・・。俺はそんなにすごい人間じゃないのに・・・
そこで、ユウはあることを思いついた。

「じゃあ、もう一度打ちましょう、ヒカルさん。今度は置石なしで。そうしたら俺の本当の実力がわかりますよ」
どうやらヒカルもその意図をくみ取ったようで
「わかった。」といって二人は碁盤へと向かった。
●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○
「黒はお前にやるよ。じゃあ互先で、コミは五目半。よろしくお願いします」
ユウはまず初めに右上隅の小目の位置に石を置いた。
「お願いします」
ヒカルは、左下隅の星に置く。
見ててください、これが俺の本当の実力なんです。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○
しばらく二人は淡々と打っていた、が途中でユウの動きが止まった。
だめだ。今回はボロボロだ。手は見えていても、思うようにことが運ばない。
やっぱりこの程度の実力なんだ、俺は・・・。
ユウは打つことをあきらめ投了した。
「ね、やっぱり俺の実力はこのくらいですよ」
「違う、お前は弱くなってなんかいない。俺が強くなったんだ」
落ち着き払った声でヒカルが言う。
ユウはヒカルのその言葉の意味が理解できずに、思わず「へ?」と素っ頓狂な声を上げてしまう。
「この一週間、俺はお前と打ったあの一局をずっとここで並べていたんだ。そして思いついたんだ。対ユウ戦の攻略法を」
すると、後ろの方から追撃するかのように、受付にいたはずの中原の声が聞こえる
「そうよ、進藤名人はね、毎日ここに顔を出していたのよ。あなたが来るかもしれないっていってね。それだけじゃないわ、あなたの家に何

度も足をはこんで不審者あつか・・・」
「やめろ、それ以上は言うな。恥ずかしいだろうが」
中原をあわてて、止めに入るヒカル。
これ以上言われちゃかなわねぇ。そう思ったヒカルはとっとと受付にもどってろ、と中原を受付へと返した。
そして、もう一度諭すように話し始める。
「あのな、ユウ。別に俺はお前に碁を打てっていう気はない、けどな、お前は何か勘違いをしているぞ。碁っていうのは日々進化するものさ。お前がもし心眼を本当に持っているんだったら、俺たちはその上を行く手をかんがえるのさ。
心が読まれたところでどうすることもできない場面ってあるじゃねぇか。それにいくら心眼っつっても、はじめから読めるわけじゃあねえだろう？早くても１０手目くらいから。おそかったら２０手くらいは様子見ってかんじじゃねぇか？
そこを逆にりようするのさ。お前のその才能は確かにすごい。それで碁を打たないっていうなら俺にくれってそういいたい。でもな、お前は所詮碁を知らない青二才。今の俺からすればお前の才能なんて強いとはおもわねぇ。」
ヒカルの言うことはほとんどあたっていた。ユウが打つ手を読むことができるのは、１５手目以上から、それに今日の碁で自分には才能があって人よりもはるかに強いと思っていたけど、それが違うこともわかった。やはり、あの時ヒカルを苦戦させたときに自分は強いと自分の才能を過信していたのかもしれない。というよりしていた。だけど、今は違う。
すこし、ユウの中に碁への興味がわき始めていた。なんだか奥が深い。すこしやってみてもいいかなという気持ちが・・

対決再び　ヒカルＶＳユウ（後書き）

すこし中途半端ですが今回はここの辺で

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9957z/

ヒカルの碁　神の一手を極めし者

2012年1月14日07時45分発行